**題名：平和統一祈願**

**お名前：原田　桃子**

(下記より本文をご記入ください)

このエッセイに応募しようとしたきっかけは、埼玉　大宮の今中さんが青年スピーチ部門に応募し、第１連合会予選大会で優勝されたことに刺激を受けたからでした。しかし、これから書こうとすることが、読まれた方が暗い気持ちになるのではないか、悲しい気持ちになるのではないか、と迷いましたが、何かに突き動かされた感じがいたしましたので思い切って書かせていただこうと思います。

私の夫の母方はかつて炭鉱の責任者をしており、義母が幼い頃の炭鉱にまつわる話を何度も何度も聞かされていました。義母は９３歳で少し痴呆もあるせいか同じ内容を幾度となく話し、聞いたというのが率直なところです。山口県の宇部というところで炭鉱の責任者をしていた義母の父は沢山の韓国、朝鮮系の方たちに炭鉱の工夫として働いてもらっていました。以下長周新聞（2024/2/8）を引用します。

「海底炭鉱だった長生炭鉱は1942年2月3日朝、坑口からおよそ1㌔㍍付近の天盤崩壊で海水が侵入する事故が発生し坑道は水没、坑内にいた労働者183人が犠牲になった。そのうち4分の3にあたる136人は朝鮮半島から強制連行された、あるいは生活苦から渡日を余儀なくされた朝鮮人だった。炭鉱があった宇部市床波海岸には、1990年代までは坑口や巻櫓（まきやぐら）の台座などの遺構が残っていたものの撤去され、現在は海面から突き出た2本のピーヤ（排気筒・排水筒）が残るのみとなっている。長い間この事実は闇に葬られていたが、市民の手で事故の史実を掘り起こし、1992年からは市民団体が遺族を招いて追悼集会を開いてきた。2013年にはピーヤをかたどった朝鮮人犠牲者追悼碑・日本人犠牲者追悼碑の二つの追悼碑を建立、「長生炭鉱追悼ひろば」と名づけ、ここで毎年追悼集会をおこなっている。」

義母の語り口調は深刻というほどではないのですが、生きているうちに私にその事実を伝えることが使命なのでしょう、私はそのことを聞く度に胸が張り裂けそうな思いに駆られ、韓民族の方々申し訳ありません、と泣きながら帰宅しました。ある時、仲間でお祈りをしている時、祈りながら皆が、アボジ、オモニ、と叫び、その声が絶叫に達した時、その声がその時の犠牲になられた方々がアボジオモニと叫んでいるかのように聞こえました。落盤時水が押し寄せてきた時、どんなに家族、父や母を思いアボジ、オモニと叫んだだろう・・・もはや叫び声が頭になり響き慟哭の涙がこみ上げました。どれほど故郷や両親の事を思ったでしょう・・・気が狂うほどだったでしょう・・・許してください、どんなに謝っても許されないと感じました。

ある時、思い至って宇部に住む方に電話し、その周辺で供養祭等がなされている事実を確認した時は、ほんの少しではありますが胸をなでおろしました。わが夫は時折異常な寒さに襲われ、暖房の部屋の中で寒い寒いと電気毛布にくるまり、ホッカイロをしても寒いというのです。その事を友人に告げると、その落盤事故と関係があるのではないか？と言われ、わたしも納得がいきました。

義母は数年前その事故の事を調べて欲しいと言い、わたしが沢山調べて資料を見せました。義母はわたしから見ればあまり信仰心のない方ですが、それでも、祈っていくと言っていました。義母と先祖たちが必死で懺悔していると感じられました。

救いだったのは、義母のお母さんは当時、人に対してあまり差別をされない方で、炭鉱で働く方達の宿舎に同級生の友人が住んでいて、遊びにいったこともあったそうです。その友人の家はとてもきれいに整理整頓がなされていて、その事にとても感心したと。時代的に差別や偏見はあったとしても、義母は母親の人格的教育がしっかりとされていたようでした。その事故の日、義母はまさに現場近くに居たようで、ある管理職の日本人が落盤しそうな坑道の中に労働者の方達を思って飛び込んで行ったそうです。周囲がとめるのもきかずに・・・その方のお名前まで覚えておりました。どんなに涙しても悲しみは薄まったりはしませんが、このエッセイを書かせていただきながら、南北統一の土台には日本の悔い改めがなければと心深くに受け止めております。どんなに言葉を尽くしても消えない罪ではありますが、機会ある度に何かさせていただこうと思っております。我が家系を代表して、許しを請いながら、贖罪の人生を歩んで参ります。

先日、２０年ほど前に縁があって韓国の方の絵を購入致しましたが、大きさや雰囲気から、我が家には飾れずにおりましたところ、南北統一局の方に差し上げる機会をいただきました。こうして何かしら、見えない力によって南北統一を思い、願い、本当に小さな一歩になれば有り難いことです。

このような機会が与えられましたこと心から感謝いたします。カムサム二ダ

2024/06/12　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　原田　桃子